

TOPICS 今号のトピックス

NHKと共催のシンポジウム&上映会を開催 1～3月開催の企画展や各種催しが好評 「出前授業」と「アナウンサー体験教室」を実施

■NHKと民放の枠を超えた受賞ドキュメンタリーのシンポ&上映会を開催

シンポジウムには放送関係者、市民、学生が参加

昨年11月、NHKと共催してシンポジウム『テレビドキュメンタリーは、いま!～受賞番組制作者と語る』(11/14・横浜情報文化センター・新聞博物館2階シアター)と『受賞番組ドキュメンタリー上映会』(11/10～23・放送ライブラリー9階情報サロン)を開催した。これは昨年6月、NHKが各番組コンクールでのNHKと民放の最新受賞ドキュメンタリーを『ザ・ベストテレビ』(NHK-BS2)で放送し、この関連企画として当センターとの共催の提案があり実現したもの。一昨年は埼玉県川口市のNHKアーカイブス施設内で一日のみのシンポジウムと上映会だったが、今回は2週間にわたり受賞ドキュメンタリー番組8本の上映会を併催した。シンポジウムには放送関係者や一般市民・学生など110人の参加があり、3時間を越える内容も好評だった。

シンポジウムは最初に登壇者関連の国内外で受賞した3本の番組(別記)のダイジェスト版を上映し、引き続き5人の登壇者による熱心なトークが展開された。

【シンポジウムでの上映番組】

『いのちの記憶～小林多喜二・二十九年の人生～』

北海道放送/2008年放送/芸術祭賞大賞

『光と影～光市母子殺害事件 弁護団の300日～』

東海テレビ放送/2008年放送/日本民間放送連盟賞

テレビ報道番組最優秀・ギャラクシー賞優秀賞

『NHKスペシャル 激流中国 病人大行列～13億人の医療』

NHK/2008年放送/モンテカルロ・テレビ祭ゴールドニ

フ賞・イタリア賞テレビドキュメンタリー部門最優秀賞

【登壇者】

姜 尚中 東京大学大学院情報学環教授

松田 耕二 北海道放送コンプライアンス室長

阿武野勝彦 東海テレビ放送報道スポーツ局専門局長

岩堀 政則 NHK報道局チーフ・プロデューサー

音 好宏(司会) 上智大学文学部教授・新聞学科長

ジャーナリズムはアクチュアリティを切り取る作業

シンポジウムでの登壇者の発言趣旨は次のとおり。

なお、シンポジウムの全容は、NHKアーカイブスのホームページ(www.nhk.or.jp/archives/)「イベント情報」に掲載されている。



最初に姜氏から「本当に力作で、疲れるくらいに胸に響くものがあり、この3本は期せずしてドキュメンタリーを作る場合のスタイル、それぞれの違いがよく表れていたように思った」そして『いのちの記憶』について姜氏は「思い入れというものが制作者から伝わり、ドキュメンタリーとドラマの手法を用いて過去に生きた人を蘇らせた。ドキュメンタリーは、これはジャーナリズム一般に言えることだと思うが、ある種のアクチュアリティがなければいけないと思う。生モノを扱うのがメディアやジャーナリズムだ。作品として成り立つのは、アクチュアリティをしっかりと切り取っていかないといけない。そこにジャーナリズムの一つの本性というものがあると思う」と感想を述べた。

『光と影』について姜氏は、「ドキュメンタリーを見たいという気持ちになるのは、自分が普段抱いている俗情というものを追認する、強化してくれる、そのためにドキュメンタリーを見るとしたならば、通り一遍の陳腐なものになっていく。ある作家が“俗情との結託”とメディアのあり方を批判した言葉があるが、人がマンネリズムを欲するかというと、“やっぱり”というものを補強してくれる、それを繰り返し追認してくれる。そういう点ではこの作品は、“やっぱり”ではなく“うーん!”と一瞬息を吞んで唸らせるものがあった。私はそこにドキュメンタリーが持っている映像ジャーナリズムとしてのある力というものを感じた」と評価した。

『激流中国』については、「NHKにふさわしい番組で、医療で一番困っている人と医療を施す側の落差を淡々と対照的に語ることによって、現在の中国が見えてくるという点で非常に感銘を受けた」と語った。

松田氏「多喜二の生き様から命の重さを描いた」



引き続き、3人の番組制作者から制作意図などが披露された。松田氏(左写真)によると、北海道放送『いのちの記憶』は、2005年に小林多喜二の母校・

小樽高商(現在の小樽商科大学)のOBから、創立100周年を記念して多喜二の番組制作の依頼があり制作をスタート。その頃は今のよう多喜二ブームもない状況だったという。松田氏は「地元放送局が地元の偉大な作家を取り上げるというのは大変意義のあることだ」と実現した。「小樽商大OBの一人で北海道放送のOBでもある元上司が基本的な構成を担当した。このOBは70代、カメラマンと編集マンは60歳を超えているので、熟年パワーで作ったという非常に珍しい番組でもあった」と紹介した。番組テーマについて松田氏は、「小林多喜二という人間には政治的なイメージが強いが、この番組ではそういう政治的というよりもイデオロギーを超えて、小林多喜二という一人の人間の魅力というものを捉えてみたかった。多喜二は70年位前に亡くなったが、その後いろいろレッテルが貼られ二転三転する評価があった。時代の類似性などを踏まえて多喜二が今生きていたらどういことを語るだろうか、ということもテーマにした。今、命の重さが軽く扱われているように思う。この番組で大事だと思うことは、多喜二の生き様とか死に様を通して、命の重さ、命の大切さというものを見た方に共感を持って頂くということ、普遍的なテーマになるが、ここに絞り込んでいくということでした」と強調した。更に最近の『蟹工船』ブームについて、「時代が追いかけてきてくれた非常に幸せな作品だったと思う」と語った。

阿武野氏「逆境の中、手探りで取材を続けた」



東海テレビ放送『光と影』について、番組プロデューサーの阿武野氏(左写真)は「この番組は取材も制作も予定がなく、ひょんなことから取材に

入ってしまった。私の会社は名古屋で、これは山口県光市で発生した事件であり、広島高等裁判所が舞台なので私達の放送エリアとは関係がない。テレビや新聞・週刊誌で、光市母子殺害事件については、ちょっと変だなと違和感を持って見ていた。構図がどうもおかしい、弁護士を鬼畜というような言い方で批判している、裁判制度を否定するような方向へ動いている、など感じていた」と背景を紹介した。更に阿武野氏は、「東海テレビが1961年に三重県名張市で起きた毒殺事件“名張毒ぶどう酒事件”(5人が死亡、当時35歳の男が逮捕されて一審無罪、二審は逆転死刑判決という稀なケースで現在も再審請求が繰り返されている)とその裁判を追っていた時期で、再審請求弁護団のメンバーの中に光市事件の主軸

弁護士となった村上弁護士がいた。ある日、名張の事件の取材から帰ってきたディレクターが少々上気した顔で『光弁護団の中に入れます』と言った。『え!? 行こう』と私は軽く即答して取材に入るようになったんです」と秘話を語った。取材の取り決めは、「弁護団会議を全部撮るといこと、弁護団は死刑廃止論にこの事件を利用しているのではないかと、売名行為ではないかとか言われていたが、つぶさに見て取材することが絶対条件だと考えた」と語った。当時の状況を物語るエピソードとして、通常は番組制作を始めると宣言すると、ドキュメンタリーに関わりたいスタッフ希望者は多いが、今回はデスクを頼んだ女性スタッフからは「赤ちゃんを頭の上に掲げて、こうやって殺したんですよ」と厳しい視線を向けられたり、効果マンに予定した30歳過ぎの男性スタッフからは居酒屋で「まだ子供が小さいんです」と言われ、言外に“やりたくない”という気持ちが伝わってきたという。阿武野氏は「もし弁護団の利用主義であるならば、取材をやめようという覚悟で取材に入った。でも半年以上の取材を重ねて、更に放送できるかできないかという局面があったんです」と話を続けた。「社内の議論で名古屋地区の私達がなぜ火中の栗を拾わなければならないのだ」と迫られ、その時、阿武野氏は「弁護団への逆風はそのまま弁護団を追うスタッフに吹いた。一時は放送が出来ないかもしれない」と深刻に思ったという。「鬼畜弁護団」と思っていた方が多かった。そのような中で番組制作は続いた。私達はまるで「鬼畜取材班」という風に呼ばれるような中で、取材を積み上げながら、手探りで番組にしていっていったという感じでした」と取材の舞台裏を語った。

岩堀氏「中国の今の姿を多面的、多層的に描いた」



NHKの『激流中国』(2007年4月から08年7月まで13本シリーズで放送)は、04年から05年にかけて、北京オリンピックに向けた中国をテーマに大型番組を提案し実現した。当時の中国は、年率10%の成長率の右肩上がりの発展が目玉され、国内には大きな変化から生じる様々な軋みが出てきた。更に格差社会を意識して調和のある社会を目指すということ、国の一大方針にも掲げ始めた時期でもあった。岩堀氏(左上写真)は「この番組では、中国国内の矛盾と格差の中で何が起きているのか、その現場にいる人間の姿を多面的、重層的に描けないか」と説明し、更に「我々にとってハッピーだったのは、北京オリンピックが近いこと、SARS問題の取材規制を契機にメディアに対する開放度を上げようという国家的な意識が出てきたことだ。これでドキュメンタリーを作れるのではないかと思ひ、このシリーズに踏み切った」と取材の背景を語った。

中国取材は取材規制や当局の監視で自由な取材は難しいと云われていたが、岩堀氏は「今回の取材に対して中国に監視

されていたんじゃないか、その中でよく撮れたね、と云われた。『病人大行列』は医療の現場である病院を舞台に、中国のドキュメンタリーを作るということで、実はハードルが高かった。欧米でも実現したことがなく高く評価され、ヨーロッパで5つも賞を戴いた。病院の中にあんなに正々堂々とカメラが入り、普通にロケをしたというのが衝撃的だったということです」と強調した。更に「開院前の早朝からの行列も病院側は撮らせたくない。病院の広報担当が時々見に来る。あのシーンも『撮るな!』と言われた。目の病気になる家族の撮影の時も『何でこんな撮影が必要なんだ』『やめてくれ、帰ってくれ!』と繰り返された。普通に撮れている様で、普通では無かったというのが実態です」と苦労話を披露した。更に岩堀氏は「隣国中国は中国脅威論とか中国崩壊論とか、政治的なイデオロギーの関わりで論じられる。我々としては、ある種二元論ではない中国のありのままの姿、それを今回は病院を舞台に、二つの世界が歴然とあることを描いた。家族は苦しみながら何とか息子を救おうと喘ぐ。一方、市場原理という全く無関係な所で、病院のビジネス的な成功を念頭に置きながら頑張る病院長がいる。そういう客観的事実を多面的、多層的に見せたかった。この作品はシリーズ12本目に放送し、一応の評価を得てよかったなと思っています」と語った。

姜氏「“命”が現代のアクチュアルなテーマだ」



続いて、司会の音教授から「ドキュメンタリーの持つ同時代性についてどう思うか」との問題提起に対して姜氏(左写真)は、「3つの番組は“命”が共通のテーマと感じた。小林多喜二という一つの不遇な人の青春、その生と死を通じて命を浮かび上がらせたいということ。光市事件の場合も命という問題に突き当たっている。医療ということも命の値段であり、『なんでこんなに不公平なの』と病人の母親が嘆き悲しんでいる所があったが、テーマは命ということになる。命が今やアクチュアルなテーマなんだ。番組はそういうものを我々に訴えかける。ただスタイルはかなり違う。対象に対する一つの距離感、あるいはその対象と一体化するほどに対象と密着していく場合と、むしろ徹底的に突き放している場合がある。必ずしも前者に客観性が無いわけではない」と述べた。

“ドキュドラマ”という手法について

松田氏は、「多喜二の番組は、ほとんど現在進行形のものを対象にして取材するわけではなかったの、手法をどうするのかということは大きな課題だった。『母』(作:三浦綾子)の一人芝居(女優・河東けいの舞台)があり、今回はこの舞台を番組の縦軸にした。心の叫びとか、そういうものをドキュメンタリーで描くという

のがなかなか難しいところもある。ドラマで再現して伝えることもできるのかなと思っている。入社時に上司から『我々は情報を扱う仕事だ。情報の意味をきちんと捉えなさい』とよく言われた。情報の情は“なさけ”ということでもあり、その“なさけ”をどう伝えるのか、どう語るのか、どうメッセージにするのかということもきちんと捉えて仕事をしなければいけないということだ。これらを伝えるために映像として北の風土の二面性をどう描くのかも課題だった。情けを伝える部分はドラマの手法も有効かとも思う。いろいろなスタイルや手法があるが、今回は必要などころに必要な手法を取ったということです」と説明した。

取材対象者との距離の取り方について

阿武野氏は、「取材中に一度は真剣に取材対象に惚れこむくらいでないといふ番組は作れないと思う。惚れこむだけの魅力が取材対象に無ければ、放送するに足る番組にはならないと思う。『光と影』は、名張毒ぶどう酒事件の延長上にあり、弁護士の職業倫理って何だろうということを中心にして、一本作ろうと制作を始めた時に光弁護団への入り口が開いた。遙か遠い所かも知れないが“何のために”“誰のために”という職業倫理をテーマに取材した。しんどい仕事をお互いに担っているという意味では、弁護団と私達の間、ある種の共感がどこかにあったという気がします」と強調した。更に「差戻し控訴審の審理は進めど弁護団に対して新聞、テレビ、通信社が来ないのはどうしてなのか、私達の取材はまさに一人旅の状態になった。被害者遺族が広島高等裁判所に入っていくのを沢山の報道陣のカメラが列を作って撮影したが、それを逆側から写し取ると、沢山のメディアと私達が対峙するような感じの構図になる。弁護団が置かれている状況そのものがそこにあるわけで、私達も孤立していることを肌身で感じる瞬間でした」と語った。「被害者のご遺族には取材の申し込みもしたが、メールで『もう、私の使命は終わっていると考えています。今は個別の取材に応じるつもりはございません』と丁寧なお断りがきました。そこで、今までの記者会見で被害者のご遺族がどういうメッセージを出そうとしていたのか、丹念に読み取ることに転換した。会見で語られた事を時系列で並べる作業をしたわけです」と語った。

作り手としての取材相手との向き合い方

岩堀氏は、中国取材を通じて「厳しい状況に巻き込まれている人間をメディアが映像化する。その時の倫理の問題は、古くて新しいテーマだと思う。制作者としては目の前に苦しんでいる家族がいる、なんとか救いの手を差し伸べたいという人間の思いはあるが、家族を一人救うことよりも、その家族が置かれている中国の厳しい状況というものを描き出すことこそが、個ではなく、プロとしてのドキュメンタリーを作る使命ではないか。彼ら

が日常を撮らせるというまで、彼らに対する向き合い方は、人間として尊重することだった。それが受け入れられ、カメラが密着できた。越えてはいけない一線なので、現場の葛藤とは別に、プロに徹して冷徹な判断を取らざるを得なかったと思います」と語った。

音氏「全国のドキュメンタリスト=サムライ達の問題提起を受け止めると、日本をよく見ていくことになる」



続いて、「番組制作の上での環境要因や事情-NHKと地方局の場合などについて」をテーマにトークが展開された後、参加者との質疑応答に移った。

会場からの質問の答えを盛り込みながら、登壇者からまとめの発言があった。

岩堀氏は「暗中模索の中で常に葛藤しながら制作している。違うスタイルがあっていいし、自分を刺激し、見る人にも刺激を与えたい」、阿武野氏は「全て分かったような気持ちになるより、気持ちに異物感があっても心に響くようなものを作りたい」、松田氏は「作り手に大事なものは志、倫理観、社会常識。これがバランスよく取れていると共感を持ってもらえるのではないか」、姜氏は「『問いを発する』もしくは『問いを新しく見つけ出す』というのが、ドキュメンタリーの持っている凄さ、醍醐味ではないか」とそれぞれ語った。

最後に、司会の音教授(左上写真)は「今日の登壇者の話を聞いて、一つのドキュメンタリーから問題が始まっていくことを思った。「地方の時代」映像祭の審査委員長を長らく務められた鶴見和子先生が『ドキュメンタリストはサムライなのだ。全国のサムライ達の問題提起というものを私達がきちんと受け止めると、この日本をよく見ていくことになりますよ』との話を思い出しました」と結んだ。(2009年11月14日抄録)

【受賞ドキュメンタリー番組上映会(11/10~11/23)】

芸術祭賞、日本民間放送連盟賞、ギャラクシー賞や外国賞などの最優秀に選ばれた8本の番組を上映(シンポジウムでの上映番組3本も含む)

『ETV特集 アンジェイ・ワイド 祖国ポーランドを撮り続けた男』NHK/2008年/89分/ATP賞テレビグランプリ

『ハイビジョン特集 認罪〜中国撫順戦犯管理所の6年』

NHK/2008年/109分/ギャラクシー賞テレビ部門大賞

『映像'07夫はなぜ、死んだのか〜過労死認定の厚い壁』

毎日放送/2007年/50分/地方の時代映像祭グランプリ他

『映像'08家族の再生〜ある児童養護施設の試み』

毎日放送/2008年/50分/日本民間放送連盟賞テレビ教養番組最優秀

『山で最期を迎えたい〜ある夫婦の桃源郷から』

山口放送/2007年/55分/日本放送文化大賞グランプリ

■ 1月〜3月開催の企画展、各種催しが好評

『昭和の広告展Ⅱ』(〜1/31アド・ミュージアム共催)、『ベスト・オブ・世界遺産展』(2/4〜3/31 TBSテレビ他協力)、CM関係では『第56回カンヌ国際広告祭入賞作品上映会』(2/11共催:ACC・協力:東映エージェンシー)『49th ACC CM FESTIVAL』(3/13共催ACC)、「放送人の会」との共催で『第2回ドキュメンタリー・ワールド』(2/13)、『第7回人気番組メモリー 世界ウルルン滞在記』(2/20)、『放送人の世界〜今野勉の人と作品』(3/20、27、4/3)などが並ぶ。現在開催中の『世界遺産展』は多くの入場者で賑わい、また各種催しは放送局、関係団体・機関の協力を得て、充実した内容で好評だ。

■ 各助成事業を受け「出前授業」と「アナウンサー体験教室」を実施



放送ライブラリーでは、小学校高学年を対象に、放送への関心と理解を深める学習プログラムを実施している。放送文化基金の助成で「出前授業」、子どもゆめ基金の助成

で「アナウンサー体験教室」(写真)をそれぞれ開催した。

「出前授業」はテレビ朝日の協力を得て実施。社会科見学で施設を訪れる学校を対象に、現役のテレビマンが「ニュースのできるまで」や放送局の仕事について自らの経験を踏まえて話す。施設内の「ニューススタジオ」体験と組み合わせると先生方からも好評で、今年度は5校・6回開催した。

「アナウンサー体験教室」は、夏休み企画として一般公募により計5回開催。NHK・フジテレビの現役アナウンサーを講師に迎え、発声練習、ニュース原稿読み練習を行った後、「ニューススタジオ」で体験を行った。また、録画した各自の体験の様子を視聴し、アナウンサーが講評した。参加した小学生や保護者からも「本物のアナウンサーから丁寧に教えてもらえて嬉しかった」「子どもがニュースに興味を持ち始めていたので良い体験になった」等の感想が寄せられた。

■ 1月に理事会、事業運営委員会、番組保存委員会を開催

1月15日に開催された今年度第3回番組保存委員会では、公開番組の放送局への配信プラン、教育・研究分野の利活用、問題となった番組の収集の考え方等を審議した。同日開催の第3回事業運営委員会では、視聴・情報システム更新経費の捻出、来年度の事業計画と予算の考え方を中心に審議した。22日開催の理事会で両委員会報告は了承された。年度末にあたって、3月11日に番組保存委員会、事業運営委員会、19日に理事会、25日に放送番組収集諮問委員会が開催される。